# 産業構造の異なる地方都市近郊集落における周辺自然環境利用の変化と野生獣出現との関連性についての比較検討

## The Relationship between the Utilization of Close Natural Environment and Appearance of Wild Animals: Comparison of Two Areas Near a Local City with Different Industrial Structure

小笠原輝・後藤厳寛・本郷哲郎

はじめに
❶調査地域および対象者の概要
❷結果
❸考察

[論文要旨]

伝統的な第一次産業からの産業構造の変化の異なる山梨県内の2つの地方都市近郊農村を対象に，集落周辺の自然環境の変化がその利用のされ方とどのように関連しているのか野生獣の出現という視点から明らかにした。上大幡地区では1960年代におこった養蚕衰退後，第二次，第三次産業へと転換した。それに伴い，耕作放棄地が増大し，同じ時期に自然資源利用を行う世帯も減少した。現在は，農業は自家消費用の田畑の耕作に限られ，自然資源利用を生活の中の楽しみとして続けている世帯がみられる。一方，中畑・心経寺地区では1980年頃から養蚕が衰退し，第二次，第三次産業へ転換すると同時に，農業は果樹や野菜類の栽培へと転換した。採草や落葉採取の利用の減少時期は上大幡地区と同じ時期の1960年頃であったが，果樹栽培には農閑期がないため，薪採取は果樹栽培転換期に行われなくなった。養蚕衰退に伴い，桑畑の多くは果樹園や畑に転換されたが，一部耕作放棄された。現在，自然資源利用は上大幡地区と比べほとんど行われておらず，また，果樹転換後も人手不足などが原因で耕作放棄地が増えている。

野生獣の出現の原因として，養蚕衰退に伴う耕作放棄地の増大と自然資源の利用の減少，範囲の狭小化が考えられた。中畑・心経寺地区における野生獣の出現を認識する世帯は，上大幡地区と比較しても少なくまた増加する時期も遅いが，地形的条件に加え養蚕衰退の時期が遅いことも一因と考えられた。

このように二次的自然との関わり方が変化した地域において野生獣の出現を防ぐためには新たな二次的自然の管理方法を考えなくてはならない。都市近郊集落という地理的特性から，都市住民を取り込んだ「森林ボランティア」活動が重要となると考えられる。継続性のある活動を行うために両地区とも各世代が参画する活動を整備する必要がある。上大幡地区では既存の環境教育施設を中心に，市民農園などへ開放して耕作放棄地を減少させるとともに，地域住民の楽しみとしての自然資源利用を拡大した形で活動を行うことが必要である。中畑・心経寺地区では果樹栽培の手伝いなどと周囲の自然環境管理とを連携させた組織や活動を作り出すことが重要であると考えられた。